

## 式亭三馬所蔵『まこと草』に関して ——『片言』との比較を通して——

長崎靖子\*

### A Study on “Makotogusa” owned by Shikitei Sanba

Yasuko NAGASAKI

#### 要 旨

筆者は拙稿(2012)で、式亭三馬著『小野篁謔字尽』(文化3年)所収「かまど詞大概」の片言語彙を、江戸時代の7種の片言資料と照らし合わせて比較した。この7種の片言資料の一つとして使用した安原貞室の『片言』(慶安3年)の抄出本に、『まこと草』(元禄5年)という書があり、三馬はこの『まこと草』を所蔵していたことが知られる。本稿では『まこと草』の内容を『片言』と比較しながら、三馬の片言描写への影響を探った。

『まこと草』の『片言』からの抄出率を調べたところ、『片言』800条の内『まこと草』には406項が抄出され、抄出率は50.8%であった。この抄出率を『片言』の各巻ごとに比較すると、後半に進むに従い抄出率低下の傾向が見られる。また『片言』巻一の抄出項目は大幅に順序の変更が見られるが、『片言』巻二以降の抄出項目は、ほぼ順序どおりに並べられており、巻一と巻二以降の抄出の仕方が異なることが明らかとなった。『まこと草』と同版で、これに先行する『憂世呉竹』(貞享5年)には、序文に貞室の『片言』を基に新たな訛言訂正の書を作る旨が書かれている。この『憂世呉竹』の序文や先の『まこと草』の抄出率、順序の調査から、『憂世呉竹』は、最初は新たな訛言訂正の書を作る目的があったが、その途中で目的が薄れ、結果的に『片言』を抄出しただけに甘んじた書となったと考えられる、『まこと草』の内容もその流れに沿うものであろう。

最後に「かまど詞大概」と『片言』『まこと草』の語を比較したところ、「かまど詞大概」と共通する『片言』の15語の内、14語が『まこと草』に含まれていることがわかった。これにより、『まこと草』が「かまど詞大概」に影響を与えた書の一つではないかと結論付けた。

キーワード: 『まこと草』, 『憂世呉竹』, 『片言』, 「かまど詞大概」, 大和言葉集

---

\*教授 日本語学

長崎靖子

## 1. 本稿のねらい

筆者は、拙稿「かまど詞大概」の語彙―「諸人片言なをし」等との比較を通して―(2012)で、式亭三馬著『小野篁謙字尽』(文化3年)所収「かまど詞大概」の片言<sup>(1)</sup>を、江戸時代の7種の片言資料と照らし合わせ、その影響関係について考察した。その結果「かまど詞大概」の片言語彙52語の内、共通する24語の片言を見出した。この7種の片言資料の中で、最も「かまど詞大概」との共通の語が多かったのが安原貞室の『片言』(慶安3年)であるが、三馬はこの『片言』の抄出本『当世利口誠草』(元禄5年)(以下『まこと草』とする)を所蔵していたことが知られる。本稿では、この『まこと草』の内容を『片言』や『まこと草』諸本と比較しながら、三馬の片言描写への影響を探る。

## 2. 『まこと草』の関連資料に関する先行研究

『まこと草』は安原貞室著『片言』の抄出本とされる。この『まこと草』の後摺本には『当世大和言葉』(享保5年)、『正誤大和言葉』(文政元年 弘化3年後摺)等がある。岡田希雄(1933)では『まこと草』に関し、次のように述べている。

古典全集本「かたこと」の解説中で、新村博士が「元禄八年亥九月吉日」に、江戸の萬屋清兵衛、大阪伊丹屋太郎右衛門、京都吉野屋次郎兵衛ら三軒の相合版として刊行せられたる世話重寶記五冊(久原文庫本)の事を紹介せられて居るのであるが、其の重寶記の事を新村博士に物語つた畏友穎原退蔵氏も亦、昭和七年十一月の「書物展望」誌上で、片言の偽版たる「元禄五年壬申歳正月吉日」刊行の「江戸日本橋萬屋清四郎版」〈○希云世話重寶記の版元と同族か〉の「まこと草」の事を説いた。其の本は小本三卷一冊本で題箋は「當世利口誠草」〈希云、野間氏の教示によるに帝國圖書館本は、題箋無く、ほかの本に「當世利口まこと草」とあり、版心は「當世」とあると云ふ〉とあり、内題は「まことぐさ」とあり、貞室片言の序跋を省き、順序を種々に變へて抄出した物であり全内容は貞室片言の範囲を出て居らず、新たに加へたのは、処々に存する師宣風の挿絵のみであつた。

※ ( ) 内は二行書きの部分)

P.44 上・下段

また『当世大和言葉』に関しても同論文で

ところで頼原氏は、其の誠草の後摺本として「當世大和言葉」小本三卷合一冊を挙げた。これは誠草の同一版木を使用し、たゞ内題のみを埋木改刻により改めたに過ぎないものであつた。

P.44 下段

とし、『まこと草』が『当世大和言葉』に名称を変えたいきさつについて、次のように述べている。

此書名は基くところがあり、商策上、悪意ある態度で此の名が付けられたものだと思ふ。と云ふのは、享保頃には大和言葉と云ふ書のものゝ相當に——と云ふよりは非常によく——行はれて居たのである。

P.49 下段

岡田は、当時雅言注釈書の類の「大和言葉」が盛んに作られており、「大和言葉」の名を冠したのは、「大和言葉」の名付けの方が商業的に利があつたからとする。

また同論文では、『まこと草』、『当世大和言葉』と同版の書である『当世嘉多言憂世呉竹』（以下『憂世呉竹』とする）について紹介している。

此の書は京大國語國文學研究室の藏本であり其の購入登録せられたのは、大正三年六月の事であるから、研究室に出入するもので、方言や國語學に注意する程の人々には、——其の性質の事まで注意はせないにしても——決して珍しくも無い書であらう。

(中略)

憂世呉竹の體裁を説明するに、當世大和言葉とほとんど寸分違はぬ同じ大きさで、縦五寸三分、横三寸七分五厘ぐらゐ、表紙は現在の元表紙であるか何うかは知らぬが、表紙の最上皮紙は、裏のも表のも、ともに全く破れ失せて、綴目のところに残る破片により、紺紙であつた事が判るに過ぎない。左のごとき自「序」<sup>(2)</sup>がある。

(中略)

斯うして

慶安三年刊行の「かたこと」

貞享五年始春上木刊行の憂世呉竹〈慶安三年より三十八年目〉

元禄五年正月摺刷の誠草〈貞享五年よりは四年目〉

享保五年青陽摺刷の當世大和言葉〈元禄五年よりは二十八年目〉

と云ふ順でかたことの原本と其の偽版的末書、及びその後摺本が、其れへ生れて行つた

のであつた。

P.45 下段～48 上段

『憂世呉竹』はその序文により貞享5年に刊行、藤氏松月という人物によるものであることが知られる（序文全文は注2参照）。岡田はこの『当世嘉多言憂世呉竹』の版木が書肆に転売されて『まこと草』となり、これがさらに大阪へ転売されて『当世大和言葉』として売り出されたのではないかと述べている。また序文の藤氏松月については「恐らくは俳人で貞室の流を汲む人であつたらうと想像するが、其の他の事は知らない」とする。

岩淵悦太郎（1933）では、『まこと草』の後摺本として東京大学国語研究室蔵の『正誤大和言葉』（弘化3年版）をあげている。

「かたこと」を抄出した刊本としては、頼原・岡田の両氏によつて、「當世嘉多言憂世呉竹」「まこと草」「當世大和言葉」の三種が見出されたのであるが、このほかもう一種をつけ加へることが出来る。それは「正誤大和言葉」と題せられるもので、初めの部分は、所謂「やまとことば」と稱せられるものに當り、その後半が、當世大和言葉と同じものなのである。

P.45 下段

以上、先行研究には『片言』の抄出本である『まこと草』に関連する書として『憂世呉竹』『当世大和言葉』『正誤大和言葉』があがっている。松井利彦（1986）「大和ことば集の研究」では、これらの片言資料を含んだ大和言葉集を〔丁〕（刊本。他の内容と合載されている大和ことば集。）として分類し、その中の「(2) 大和ことば集が片言直しと合綴されているもの。」の中に入れてある。次がその諸本である。

- ㉞ 「當世大和言葉」。三卷。一七六語。雑配列。挿絵あり。片言直しと合綴。無刊記。
  - ㉟ 「正誤大和言葉」。二卷。㉞に一三語の大和ことばを増補するなどの若干手を加えたもの。挿絵なし。文政元年鹽屋平助板。
  - ㊱ 「正誤大和言葉」㉟の弘化三年堺屋新兵衛版。
  - ㊲ 外題「増補大和言葉」<sup>(3)</sup>。折本。二八六語。分類體。醉雅子の序文。寶曆二年菱屋治兵衛板。
- P.627
- ※㉞、㊲は国会図書館蔵、㉟は個人蔵、㊱は東京大学国語研究室蔵。

『まこと草』とそれに関連する書を取り上げた研究は、管見の限り上記の先行研究に見るの

みであり、またこれらの先行研究においては、『片言』との内容の比較等、細かい記述はなされていらない。そこで本稿では、『片言』と『まこと草』との内容を具体的に比較し、『まこと草』が『片言』のどの部分をどの程度抄出したものであるのか、抄出にあたり何らかの意図や傾向が見られるか等を観察しようと思う。『片言』は『近代語研究』第三集（1972）所収（京都 荒木利兵衛板、東京大学総合図書館蔵）、『近世方言辞書集成』第一巻（1998）所収（京都 中野道伴板、西尾市岩瀬文庫蔵）の影印本を用い、参考として白木進編著『かたこと』（1976）、白木進・岡野信子編著『「かたこと」考』（1979）を使用する。『まこと草』は国会図書館蔵の『まこと草』（元禄5年 萬屋清四郎板）とその活字本（朝倉治彦他編『未刊文藝資料 第一期4』（古典文庫 1951）を用いる。古典文庫の解説では『まこと草』に関して

『まこと草』。上・中・下三巻、各巻見開き画二面宛。天地六寸二分（匡廓四寸五分）、左右四寸三分（匡廓三寸一分）、一面八行、各巻の丁数は卅一、廿三、十四を算する。柱題は「當世上（中、下）とあり、巻末に「元禄五壬申歳正月吉日、日本橋万町角、萬屋清四郎板」とした刊記がある。

P.69

とある<sup>(4)</sup>。

この『まこと草』の他、参考として『まこと草』の後摺本である『当世大和言葉』『正誤大和言葉』の内容も確認する。『当世大和言葉』は国会図書館本二冊（いずれも無刊記であるが、一書は見返しに弘化2年の記述が見られる）、『正誤大和言葉』は野田市立図書館蔵（弘化3年 堺屋新兵衛版）を用いる<sup>(5)</sup>。

### 3. 『まこと草』と『片言』の比較

#### 3-1 『まこと草』と『片言』の体裁

白木（1976）では『片言』の篇次と体裁について次のように記述している。

全五巻、各巻頭には一、嘉多言 二、佳太言 三、仮染言 四、閑他故東 五、可太古止 と万葉仮名で表題をかかげる。

序文について本文は全篇八〇〇条。はじめは「冥加」「自在」とおもいつくまに、あるいは平素懸案の主題をとりあげているが、やがて第三巻のなかばから篇目をたて、

巻三（後半）時節 人倫併人名 衣服

長 崎 靖 子

卷四 器財 支躰 病名 木 草 虫 魚 鳥 獸 飲食 国名所併寺号  
 卷五 居所 雑詞 湯桶言葉 いはずしてもことかき侍るまじきこと葉  
 とつづき、最後の第八〇〇条を、雷雨 霜 みぞれ 霧 露 霰の自然現象のおかしさを叙してむすんでいる。 P.169

白木 (1976) では『片言』の項目に一つ一つ数字を付し、全部で800条（この後便宜的にそれぞれの項目を、『片言』は「条」、『まこと草』は「項」とする）とする。この800条のうち『まこと草』には406項が含まれ、抄出率は50.8%となる。これを『片言』の巻ごとに比較すると、

表 1

	『片言』 (条)	『まこと草』 (項)	抄出の割合 (%)
卷一	23	17	73.9
卷二	91	66	72.5
卷三 前半	150	74	49.3
後半 時節之部	20	15	75.0
人倫併人名之部	65	34	52.3
衣服之部	19	13	68.4
卷四 器財部	89	35	39.3
支躰部	19	10	52.6
病名部	17	10	58.8
木部	12	8	66.7
草部	23	9	39.1
虫部	12	9	75.0
魚部	11	10	90.0
鳥部	8	4	50.0
獸部	11	8	72.7
飲食部	23	15	65.2
国名所併寺号	31	11	35.5
卷五 居所部	15	8	53.3
雑詞部	105	19	18.1
湯桶言葉	10	2	20.0
いはずしてもことかき侍るまじきこと葉	46	29	63.0
	800	406	50.8

表1 のようになる。

それぞれの割合は、巻一が73.9%、巻二が72.5%、巻三が53.5%、巻四が50.4%、巻五が33.0%となり、抄出された内容は巻が進むにつれ減少していく傾向が見られる。さらに具体的に見ていくと、巻三前半が49.3%、後半「時節之部」が75.0%、「人倫併人名之部」が52.3%、「衣服之部」が68.4%、巻四「器財部」が39.3%、「支躰部」が52.6%、「病名部」58.8%、「木部」が66.7%、「草部」が39.1%、「虫部」が75.0%、「魚部」が90.0%、「鳥部」が50.0%、「獸部」が72.7%、「飲食部」が65.2%、「国名併寺号」35.5%、巻五「居所部」53.3%、「雑詞部」が18.1%、「湯桶言葉」が20.0%、「いはずしてもことかき侍るまじきこと葉」が63.0%である。

### 3-2 『まこと草』と『片言』の内容

次に、『まこと草』に抄出された内容を『片言』の内容と比較していく。岡田（1933）で

内題は「まことぐさ」とあり、貞室片言の序跋を省き、順序を種々に變へて抄出した物であり全内容は貞室片言の範囲を出て居らず、新たに加へたのは、処々に存する師宣風の挿絵のみであつた

P.44 下段

とあるように、『まこと草』は『片言』の内容の順序をかえて抄出したものであり、内容は『片言』の範囲内に留まる。『まこと草』の第1項は「いまめかしき事成べけれども御盃いたゞき侍らんといふべきを」で始まる。「いまめかしき事成べけれども」の部分は『片言』の第1条の最初の部分を取り出したものであるが、「御盃いたゞき侍らんといふべきを」以下は『片言』の第19条に見られる内容である（『片言』では「<sup>おさかづき</sup>御盃をいたゞき侍らんといふべきを」）。『片言』の第1条では、「いまめかしき事成べけれども」のあとに「<sup>みやうが</sup>冥加といふこと葉のつかひやう有べしと云り」と続く。『まこと草』の中で『片言』と大幅に順序が異なるのは、『片言』の巻一にあたる部分だけで、『片言』巻二以降は、いくつかの異同はあるものの、ほぼ『片言』の順序の通りに並ぶ<sup>(6)</sup>。『まこと草』と『片言』巻一の順序の異同は次のようである。

『まこと草』と『片言』巻一の順序

1項 = 19条 2項 = 15条 3項 = 16条 4項 = 17条 5項 = 18条 6項 = 5条  
7項 = 1条 8項 = 2条 9項 = 3条 10項 = 4条 11項 = 6条 12項 = 7条  
13項 = 9条 14項 = 12条 15項 = 14条 16項 = 21条 17項 = 23条

## 長崎靖子

内容に関しては処々に省略や異同が見られる。例えば、『まこと草』第3項「<sup>しやうじんもの てうさい</sup>精進物の調菜を。ほめ侍るあいさつに」は『片言』巻一第16条にあたるが、後半部分の「此二字を。しつらひとよむ時は。聊心替ると云り」の部分が省略されている。『まこと草』第4項の「さかなといふ事も」は『片言』巻一第17条にあたるが、「<sup>さかな</sup>肴と書<sup>かく</sup>こと<sup>しか</sup>然るべからざること、云り」が「さかなとかく事然るべからず」（下線は筆者による）となっている。他に『片言』巻二の第107条「<sup>なく</sup>泣をいふを。……しるすにいとまあらず」が、『まこと草』では「一なくといふを……」と「一ゆ、しきといふは……」の二つの項目に分かれていたりするなどの相違が見られるが、全体として内容に大きな違いはない。

以上、『片言』と『まこと草』の内容を比較すると次のことが明らかとなる。まず、『まこと草』の『片言』からの抄出率は50.8%であり、巻ごとに抄出率は、後半に従い低下の傾向が見られる。特に巻五の「雑詞部」は18.1%と最も抄出率が低く、その中でもオノマトベに関しては、全く抄出が見られない。順序に関しては、巻一ではかなりの異同があるが、巻二以降は、ほぼ『片言』の順序どおりに並べられており、巻一と巻二以降では、この点で大きく隔たりがある。

抄出の基準に関して岩淵（1933）では、『まこと草』の後摺本である『当世大和言葉』について、

大體から云へば、「かたこと」の項目中、非常に長文のものは全く除かれ、俚諺も殆ど全部削除されてゐる。そして或る項目はその前半部分のみが採られて、後半は除かれている。

P.50 上段

と述べている。そしてさらに

「當世大和言葉」が、極めて杜撰無責任なもので、單に商略上の産物であると云ふ事は「かたこと」と詳細に比較することによつて、益その感を深くするのである。

P.50 下段

と『当世大和言葉』が「商略上の産物」する。しかし『当世大和言葉』に先行する『憂世呉竹』『まこと草』は、『当世大和言葉』とは異なる刊行意図があったのではないかと考える。この点を述べる前に、『当世大和言葉』『正誤大和言葉』の内容を観察しておく。『当世大和言葉』は国立国会図書館蔵の二種、『正誤大和言葉』は野田市立図書館蔵を調査した。



#### 4. 『当世大和言葉』『正誤大和言葉』について

##### 4-1 『当世大和言葉』二種

国会図書館蔵の『当世大和言葉』二種の内一種は、表紙の見返しに弘化2年（1845）に記した次のような内容が見られる（以降この書を『当世大和言葉』Ⅰ類とする）。

此本画之時代ヲカシカウルニ慶安二年トミュ今弘化二至テ慶安之時代當世之本何ゾ當世ニ  
○ベキヤ

先に示したように、『まこと草』は、上・中・下の三巻本で、大きさは、「天地六寸二分（匡廓四寸五分）、左右四寸三分（匡廓三寸一分）」とある（筆者の調査では縦18,5 cm、横13,0 cmであった）。本書は縦15,0 cm、横10,8 cmである。一面が8行で、各巻の丁数がそれぞれ31、23、14である点、柱題が當世上、中、下とある点は『まこと草』と同じであるが、『まこと草』が巻末に「元禄五壬申歳正月吉日、日本橋万町角、萬屋清四郎板」と刊記があるのに対し、本書は無刊記である。また、大和言葉という名を冠しているが、大和言葉は収録されていない。

国会図書館のもう一種の『当世大和言葉』（以降『当世大和言葉』Ⅱ類とする）は秩入りである。本書は縦15,8 cm、横11,0 cmで表紙に『珍藏 當世大和詞』とある（「珍藏」は後で書かれたものかもしれない）。表紙見返しには「當世 やまと詞大全 全」とあり、これに続き「当世大和言葉」と記され「あきつしまとは」で始まる大和言葉集が8丁分掲載されている<sup>(7)</sup>。この後に『まこと草』と同板の部分が続くが、途中「一 あいしらふぞ。」の項目後半の「葉なるべければくるしかるまし」から「一 忽緒といふべきを。」の項途中までの2丁分が抜けている。この書には亀田次郎（国語学者 1876～1944）が、次の識語を付けている。

○本書は岡本橋仙翁<sup>(8)</sup> 旧藏本なりと竹苞樓<sup>(9)</sup> 主人より聞けり本書は「安原貞室のかたこと」の末書なり無刊記なれども挿圖其他より察するに元禄以前の刊行とおもはる類本二挿画無きものもあり又享保年間出版のものもあり蓋本書を後人其當時流行せる「大和こと葉」に真似て改題せしもの、如し上卷二十九、三十の両丁落丁せるは惜しむべし他日補修すべし

昭和十五年十月

吟風記

本書に刊記は見られぬが、出版元は「書林 大坂船町 千草屋新右衛門」とある。

#### 4-2 『正誤大和言葉』

『正誤大和言葉』（野田市立図書館蔵）は、松井（1986）に記載されている『正誤大和言葉』（文政元年鹽屋平助板）の後摺本で、東京大学国語研究室本（以下国語研究室本とする）と同じく「弘化三年 堺屋新兵衛」とある。国語研究室本に関しては、岩淵（1933）に詳細が語られている。岩淵によると国語研究室本は「縦五寸八分、横三寸九分の小本二冊」で、上巻に石津亮澄の序文<sup>(10)</sup>（「文政とあらたまりし としのふみ月」に書かれたもの）がある。松井（1986）では、この序文で、本書が大和言葉集にはっきり性格付けされたとし<sup>(11)</sup>、『当世大和言葉』との性質の相違を述べている。国語研究室本は序文に続き凡例<sup>(12)</sup>が記され、本文の最初に「正誤大和言葉上 歌詞註釋之部」、これに「一あきつしまとは」で始まる大和言葉が続く。野田市立図書館蔵の『正誤大和言葉』も同様の仕立てで、縦17.5 cm、横11.6 cm、上下二巻、上巻に石津亮澄の序文があり、凡例が記され、その後大和言葉集が9丁分続く。これは『当世大和言葉』Ⅱ類に見る大和言葉集と同版である（『当世大和言葉』Ⅱ類では「一玉のえだとは」から「一らてんのちくとは」までの一丁分が抜けている）。

また岩淵（1933）では、国語研究室本の体裁について

即「正誤大和言葉」の上巻にあるものが丁度「當世大和言葉」の巻上に當り、正誤の下巻は、當世の巻中と巻下を含んで居り、正誤の上巻のほうにある

正誤大和詞當言註釋之部

と云ふのと、下巻の初めにある

正誤大和言葉下

と云ふのも、一見して明かに入木したものである事が分る。

P.48 上段

とする。野田市立図書館蔵の『正誤大和言葉』も同様の仕立てである。

#### 4-3 「大和言葉」の名称

『まこと草』の後摺本として『当世大和言葉』二種と『正誤大和言葉』の内容を観察したが、『まこと草』と大きく異なるのは、『当世大和言葉』Ⅱ類、『正誤大和言葉』には、本文の前に大和言葉集が含まれている点である（『当世大和言葉』Ⅰには大和言葉集は見られない）。「2. 『まこと草』の関連資料に関する先行研究」で述べたが、岡田（1933）では『まこと草』が『当世大和言葉』『正誤大和言葉』に名称が変更された理由を、当時、雅言注釈書の類の「大和言葉」

が盛んに作られており、「大和言葉」の名付けの方が、商業的に利があったからとする。『片言』の抄出本である『憂世呉竹』も『まこと草』も片言のみが掲載されたいわゆる訛言訂正の書である。故に、これを「大和言葉」と名称変更する場合、何らかの工夫が必要であった。そこで、『当世大和言葉』Ⅱ、『正誤大和言葉』では、これら訛言の書に大和言葉集を合綴することにより、当時流行していた「大和言葉」の名を得るといふ商略上の工夫をしたというわけである。

## 5. 『憂世呉竹』『まこと草』刊行の意図

以上、『当世大和言葉』『正誤大和言葉』の訛言部分は、『まこと草』と同版であり、大和言葉集を加えることにより「商略上の産物」となった。しかし『まこと草』に先行する『憂世呉竹』は「商略上」成ったものではない。『憂世呉竹』刊行に関しては、藤氏松月なる人物の序文に「爰に貞師正明の嘉多言雙紙こそ宜にいみじふもかきていとおかしければ板行のすたれるを惜むこゝろに浮世呉竹と名付代々のむかしを忍びていまあづさにちりばめ小童の僻言いふをすぐ直なるにせんと箋につたふ（全文は注2参照）」と、貞室の『片言』がすたれてしまったことを嘆き、『片言』を基に新たな訛言訂正の書を作ることを目指した旨が記されている。『当世嘉多言憂世呉竹』の題からも、訛言訂正の意識があったことが窺われる。そのため最初は『片言』巻一の項目の順序を変更するなどの工夫をしたものと思われる。しかし、何らかの理由で、途中から当初の目的が薄れ、結果的に『片言』を抄出しただけの「偽版的」な内容に甘んじてしまった、これが『憂世呉竹』成立の流れと考えられる。これに続く『まこと草』の刊行も、名称に「当世利口」とあるように、やはり訛訂正の書という意識がまだあったのではないだろうか。

## 6. 『まこと草』と「かまど詞大概」の片言

最後に『まこと草』と「かまど詞大概」の片言の関係について観察していく。拙稿（2012）の調査では、『片言』と「かまど詞大概」に共通する片言は15語であった。その中で、『まこと草』に含まれていない片言は「一 くほんなんだうびしやもんたう 観音堂毗沙門堂などを ○くはんのど ○びしやもんど」の条だけで、他はすべて『まこと草』に含まれている。下記にその内容を示す。『片言』は「片」、『まこと草』は「誠」、「かまど詞大概」は「カ」とする（※は筆者による）。

- 一 とび 鷺 ○とんび「片」
- 一 とび 鷺を。とんび「誠」

長崎靖子

※但し、『まこと草』では、鶉（ひよどり）『片言』（552条）、鶺鴒（みそさんざい）『片言』557条と共に一項目にたてている。

・鶺鴒はとんび「カ」

一 外家の衣類を ○きものといふべきを。きりものといふこと然るべからず。きる物とはいふべき歟「片」

一 外家の衣類を。きものといふべきを。きりものといふ。事然るべからず。きるものとはいふべきか「誠」

・着物はきりもの「カ」

一 きふを ○きんのう ○きによ「片」

一 きふを きんのふ きによ「誠」

・昨日をきんにやう「カ」

一 行燈を ○あんど。二字ともに唐韻なるがゆへに ○あんどんよしと云り「片」

一 行燈を。あんど。二字ともに唐韻なるがゆへにあんどん（か）しといへり「誠」

・あんどはあんどん「カ」

一 圍爐裏を ○ゆるりはわろし。又いるりとはいふべし。假名遣ひの書にいろりとあり「片」

一 圍爐裏を。ゆるりはわろし又いろりとはいふべし「誠」

・いろりはゆるり「カ」

一 狸を ○たのき「片」

一 狼を ○おほかめ「片」

一 狸を。たのき。狐を。きよつねはわろし 野狩はよし「誠」

※「狐を。きよつねはわろし 野狩はよし」は『片言』第560条にある。但し『片言』では「狐を ○けつねはわろし○くつね○くつに○きつ○きつに○野狩などはよし」と記載する。

一 狼を。おほかめ。「誠」

・狼 狸はお、かめたのき「カ」

式亭三馬所蔵『まこと草』に関して

- 一 榎欄しゅろを ○しよろ ○すろとは哥うたにもよめり「片」
- 一 榎欄しゅろを。しよろ。すろとは哥うたにも讀り「誠」
- ・しゅろぼうき箒はしろぼうき「カ」
- 一 手裏劍しゅりけんを ○しりけん「片」
- 一 剃刀かみそりを。かみすり。手裏劍しゅりけんをしりけん。「誠」
- ・手裏劍しゅりけんはしりけん「カ」
- 一 雪駄せつたを ○せきだといふはわろしといへど。苦しくるかるまじき歟。  
せちだ。せつたなどいふは耳みみに立てあし。(略)「片」
- 一 雪駄せつたを。せきだはわろしといへど。くるしかるまじきか。せちだ。せつたなどいふはみ、  
に立てあし。(略)「誠」
- ・雪踏せつたをせきだ「カ」
- 一 迷まよひ子こを ○まへ子こ「片」
- 一 迷まよひ子こを。まへごはわろし「誠」
- ・まよこひ子こはまいご「カ」
- 一 草履ざうりを ○じやうりはいやしきといふ人あれども少もくるしからず。金剛こんがうといふもよし。(略)「片」
- 一 草履ざうりを。じやうりはいやしきといふ人あれども。少すこもくるしからず。金剛こんがうといふもよし。  
(略)「誠」
- ・草履ざうりはぜうり「カ」
- 一 福祿壽ふくろくじゆを ○ほくろくじ「片」
- 一 福祿壽ふくろくじゆを。ほくろくじ。牧溪和尚もつけいおせうをもつけ「誠」
- ※「牧溪和尚もつけいおせうをもつけ」は『片言』第334条にある。但し『片言』では「牧溪和尚もつけいおしやうをもつけおうしよう」と記載する。
- ・福祿壽はほくろくじん「カ」
- 一 夷えびすを ○えべす「片」

## 長崎靖子

一 夷<sup>えひす</sup>を。ゑべす「誠」

※「うつけたるものを」（『片言』第290条）と同じ条にあり。

・夷<sup>えひす</sup>はゑべす「カ」

上記が「かまど詞」と共通した『まこと草』所収の片言である。安原貞室の『片言』と比較すると、本文の異同、表記の相違は多少見られるが、全体としてはほぼ内容に違いはない。三馬が「かまど詞大概」の片言を記すうえで、『まこと草』の内容を参考にしたかどうかは定かではないが、少なくとも三馬の蔵書の中に、片言資料である『まこと草』があったことは事実であり、三馬の著書に見る片言がこの書を参考とした可能性は考えられよう。

## 7. おわりに

『まこと草』が三馬の著作に与えた影響に関しては、「かまど詞大概」の語彙の比較だけでなく、三馬の著作全体に使用される片言と比較していく必要がある。この調査に関しては別稿に譲ることとしたい。

## 注

- (1) 『浮世風呂』三編（自序の「<sup>かなのれい</sup>假字例」）には「片言」に関し  
○打遣置<sup>うちやつとけ</sup>など、詰る<sup>つめ</sup>言<sup>ことば</sup>○ちやまが（茶釜 左ルビ）などいへる<sup>かたこと たぐひ ぞくこ よ</sup>片言の屬は俗語に據る所也<sup>がぞく</sup>雅俗の  
異同は傍訓に従ひて會得あるべし

という、説明がなされている（下線は筆者による）。これを踏まえ、本稿では、「片言」を  
日常の話しことばに見られる語形、発音、言いまわし、使い方などが不完全、不正確なことば  
と定義する。

- (2) 『憂世呉竹』の序文は次の通りである（大阪大学付属図書館蔵書〈国文学資料館マイクロ資料〉を使用）。

文はみぬ世の友と沙汰し<sup>ふみ よ とも さ た</sup>し<sup>し</sup>もにこゝろのはたらく便ともなり此世の風俗<sup>このよ</sup>わきまふる中達<sup>なかだち</sup>とかや  
爰に貞師正明の嘉多言<sup>ていしまさあきら かたこと さうし</sup>雙紙<sup>むべ</sup>こそ宜に<sup>い</sup>みじふもかきていとおかしければ板行のすたれるを惜むこゝ  
ろに浮世呉竹と名付代<sup>うきよくれたけ なづけよ</sup>のむかしを忍びていまあづさにちりばめ小童の僻言<sup>せうどう ひがこと</sup>いふを直なるにせんと  
箋につたふこのんで友とし志<sup>とも こゝろざし</sup>てもてあそばんになど誤事を知らん人として嘉多言<sup>あやまること</sup>をのみいひ侍る<sup>はべ</sup>  
も一向に文盲たる業あやまりをもて誤をつぐのたぐひ淺間敷本意<sup>あさましくほい</sup>なきに侍らずや愧べし〜黄鳥<sup>くわうてう</sup>  
の鳴音<sup>なくね</sup>だもならばしにて三光<sup>さんくわう</sup>をうたふときけば今なん人となり嘉多言<sup>かたこと</sup>を悔あらためずは鳥にもしかざ  
るべけんやとしかいふ

于時貞享五年戊辰春の朝霞<sup>ししゆん あさかすみ</sup>とともに箋<sup>よて</sup>を引<sup>ひく</sup>

藤氏松月

## 式亭三馬所蔵『まこと草』に関して

- (3) 「増補大和言葉」も片言が合綴されたものであるが、『まこと草』とはまったく別系統のものである。松井（1986）では大和言葉の部分は「〔乙〕イロハ順序配列で、「いまち月」から始まる専書。〔甲〕の増補改編本」に属するものであり、片言の部分は「直接的には『男重寶記』（元禄六年刊）の「日本諸國詞づかい」を承けて成立しており、『當世大和言葉』とは直接的な関係はない」としている。
- (4) 『まこと草』には式亭三馬の「式亭」印の他、「素石園木村蔵」「苔番山房印」「玉水草堂之印」「只誠印」が押されている。このうち、「素石園木村蔵」は、幕末から明治の俳人木村素石、「只誠印」は、同じく幕末から明治の演劇研究家で書籍蒐集家として知られる関根只誠の印であるが、他の印記の人物については不明である。
- (5) 『憂世呉竹』に関しては大阪大学付属図書館蔵（国文学研究資料館マイクロ資料）を入手したが、『まこと草』の上巻にあたる部分のみであるため、序文のみを参考とし（注2参照）今回は調査資料から外した。
- (6) 『片言』巻四の「支体部」にある「指を ○いび」が、「器財部」に紛れるなどいくつかの異同は見られる。
- (7) この大和言葉集は、松村（1986）では〔甲〕に分類されているもので、「原本の形態を留めていると考えられる諸本である」としている。
- (8) 京都万屋旅館主人。
- (9) 京都寺町の古書店。寛延4年（1751）の創業。
- (10) 岩淵（1933）では序文の署名を「石津亮澄」、松村（1986）では「石津亮（花押）」としているが、江戸後期の歌人「石津亮澄<sup>すけずみ</sup>」（安永8年～天保11年 1779～1840）のことと思われる。
- (11) 松村（1986）によると、『正誤大和言葉』の序文には「をみな子の手習ふかたはらのもてあそひくさ」とあり、石津が「冒頭部の大和ことば集の部に基ついて女性用であると解釈した」とし、本書が「ふるき哥の詞また女と（「た」か？）ち書かはせる消息ふみの詞などをあまたあつめてこれかこゝろはへを注釋し證哥をも引へきものはひきなとし」と女性のための大和言葉集という性格づけがなされているとしている。
- (12) 松村（1986）では『正誤大和言葉』は、凡例にも  
やまとことばといふ事は、我日本のことばといふ事なり、されば古今和歌集の序にも、やまとうたは人のこころをたねとして、とみえたり（以下略）  
のように「片言直しより大和ことばについて記されることが多い」とし、『當世大和言葉』との相違を述べている。

## 参考文献

- 岩淵悦太郎（1933）. 「かたこと」の末書「正誤大和言葉」, 『方言』, 第3巻第7号  
岡田 希雄（1933）. 「片言の末書たる憂世呉竹と當世大和言葉」, 『方言』, 第3巻第5号  
白木 進編（1976）. 『かたこと』, 笠間書院  
白木 進・岡野 信子（1979）. 「かたこと」考, 笠間書院  
長崎 靖子（2012）. 「かまど詞大概」の語彙―「諸人片言なをし」等との比較を通して―, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第23巻第1号  
松井 利彦（1986）. 「大和ことば集の研究」山田忠雄編『國語史學の爲に 第二部 古辭書』, 笠間書院